

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：21201
 研究種目：基盤研究(C)（一般）
 研究期間：2014～2019
 課題番号：26360050
 研究課題名（和文）コロニアリティ、人種、ジェンダー：プエルトリカンのジェンダーと米国フェミニズム

研究課題名（英文）Coloniality, Race and Gender: Puerto Rican Gender and US Feminism

研究代表者

三宅 禎子 (Miyake, Yoshiko)

岩手県立大学・公私立大学の部局等・教授

研究者番号：30305271

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：プエルトリコでは、2017年ハリケーン・マリア以後、50万人以上の住民がアメリカ本土へ移住したと見られている。島の人口が減少し、米国全土へ人口が拡散しているなかで、プエルトリコはますますアメリカ社会とのボーダーが薄れてきている。一方米国では、フェミニズムズ、あるいは状況の異なる米国内の多様な女性たちを包摂するインターセクショナル・フェミニズムが米国フェミニズムの中で重要な位置を占めるようになった。その結果、ジェンダー以外の多様な差別をフェミニズム理論が内包し、視点が多角的に発展し、プエルトリコ女性たちもその中で重要な位置を占めるようになってきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、今もなお脱植民地化が未完成の社会におけるフェミニズムの態様に関するケーススタディであり、ジェンダーとコロニアリティ、人種との関係を理論化する上で重要な貢献を成しうる研究である。特に、米国領土というプエルトリコの特長から、欧米先進国対第三世界という図式に当てはまらない独自のフェミニズム理論を提起する。また、主権国家の周辺地域、あるいは、主権国家内のマイノリティー集団において急速に進展するフェミニズムに焦点を当てる研究は、日本のジェンダー研究に欠落しがちな点であり、日本におけるグローバル化する国際社会におけるジェンダー理論の深化に貢献する。

研究成果の概要（英文）：After Hurricane Maria in 2017, many people left the island to go to the continent of the United States. The population of the island has decreased, and the population has spread to the U.S., unlike the time when the population was concentrated on the east coast of the United States. In these circumstances, Puerto Rico is “losing its border” with US society, each time a little more.

In the United States, feminisms originated from black feminism, or cross-sectional feminism that included diverse women in the United States in different situations, and has now become an important part of US feminism. As a result, their feminist theory contains a variety of discriminations other than gender, and the viewpoint developed from multiple perspectives; thus the problems of women in Puerto Rico occupy an important role in it.

研究分野：ジェンダー

キーワード：Puerto Rican gender US feminism coloniality

1. 研究開始当初の背景

1898 年以来現在に至るまでプエルトリコが米国領土であるという状況は基本的に変わっていない。この間、多くの島民が米国本土へ移り住み、その数は今や島人口を凌駕するが、その多くは、貧困、失業、義務教育からのドロップアウトなど、困難な生活を強いられている。本研究が実施してきた研究では、"colonialized"あるいは"marginalized"であるプエルトリコ人女性たちが、女性たちの置かれた厳しい状況を変革するために、自らの植民地であるという政治的立場を前提にし、その状況を逆手にとって能動的に状況を変革しようとしている点を明らかにしてきた。米国議会でのロビー活動、米国女性団体との連携など、現存する制度のなかで可能な条件を最大限に利用するという現実的選択は、独立＝非独立、反米＝親米といった旧来の対立軸に基づく政治対立の構図にパラダイム転換を起こしてきた。

一方、これらの運動が社会に及ぼした影響は、プエルトリコ内にとどまらない。米国では、人種、マイノリティ、文化的多様性の概念の形成と変容の過程に、プエルトリコ・フェミニズムが深く関与してきた。例えば、ヒスパニック・ハーレム地区貧困層の医療に携わったプエルトリコ人医師 Dr. Helen Rodriguez-Trias (1929-2001)は、リプロダクティブ・ライツの運動に参加し、60 年代 70 年代とプエルトリコ人女性を対象とした米国当局による秘密裏の実験的避妊手術を止めさせ、医療における人種差別行為を告発した。さらに、American Public Health Association初のラテン系女性会長となり、女性の健康問題に関する運動を、米国以外の第三世界へ拡大させていった。米国発祥のリプロダクティブ・ライツの運動自体は日本にも知られているところであるが、米国内に存在するこのようなコロニアリティをめぐるフェミニズムについては日本ではあまり知られていない。

また、米国のバイリンガル教育においても、プエルトリコ人女性の運動は重要な役目を果たした。1950 年代、当時のニューヨーク市の教育担当者たちは、プエルトリコ人移民の急増に対応し、スペイン語による指導と第二外国語としての英語教育プログラムに取り組んだ。この点は、建国当初から居住していたメキシコ系児童に学校でのスペイン語使用を禁止した対応と大きく異なる。市当局が、プエルトリコ人児童の教育程度の低さを、プエルトリコで実施されていた米国政府の教育に原因があると考え、進歩的な政策を採用したためである。市当局は、プエルトリコ人女性 Ana Peñaranda Marcial など多くのプエルトリコ人女性を教員として採用し、続く 60 年代、公民権運動のさなか、Evelina Ló Antonetti や Antonia Pantoja といった女性たちも、プエルトリコ人のコミュニティ活動の発展とバイリンガル教育の普及に多大な貢献をした。米国政府は、プエルトリコを統治し始めると、教員養成コースやプエルトリコ大学を創設したが、その卒業生の多くが女性であった。プエルトリコ人女性が、公衆衛生・教育の分野で顕著な功績を残す結果を生み出したのは、アメリカの統治政策そのものでもあった。植民地的状況から生まれた英語とスペイン語という二つの言語と向かい合ってきた歴史、マイノリティとしての周辺化された存在からくる差別への取り組み、それらが実は、結果的にメトロポリスであるアメリカ社会の質的変化に深く影響を及ぼしたのである。また、プエルトリコ人は不法移民問題から除外されるため、他のマイノリティ集団内でより積極的に権利主張を行うなどの特徴も指摘されている。本研究では、このような米国内に存在する複雑なコロニアリティをめぐるフェミニズムについて焦点を当て、フェミニズムの変容の態様を分析することを目指した。

2. 研究の目的

本研究では、プエルトリコ人女性たちのフェミニズムが、メトロポリスであるアメリカ社会を巻き込みつつ当該社会に与えている影響の態様を明らかにすることを目的に、以下の研究を行った。

① 日本でコロニアリティをめぐる米国内の女性問題が把握されていない大きな原因の一つに、プエルトリコ人フェミニズムが、米国のブラックフェミニスト運動、或はカラー・オブ・ウーマンとして伝わってきていることが挙げられる。それは、彼女たちが米国のブラック・フェミニスト、その他のマイノリティ・グループと共闘することが多いためであるが、コロニアリティをめぐる問題では、置かれている立場が異なり特殊である。その様態を文献資料

分析および現地調査により明確にする。また、米国内で、似た様な状況にあるジャマイカやドミニカの女性たち、またメキシコ系との共通点、相違点も明らかにする。

② 昨今、米国とラテンアメリカ・カリブ地域間におけるつながりが増大しているが、そのことにより、米国内におけるラティーノ研究、エスニック研究、フェミニズム研究、ラテンアメリカ地域研究分野の相互関連性が高まっているとの指摘がある(Acosta-Belé 2000)。相互関連性が高まる中で、ラティーナ女性が発言権を強めることで、ジェンダー問題には無関心であったエスニック研究に新しいジェンダーの視点が加わり、また、フェミニズム研究分野においては、白人中産階級を主流とするフェミニズム研究に、格差の問題や貧困問題、エスニックグループ間の相違などの新たな視点を付加してきている。しかも、マイノリティの中でもプエルトリコ人女性の存在は特殊であり、米国市民でありながら、ラテンアメリカ・カリブ地域のフェミニズムと連携しつつ女性運動が展開されている事例が多く見られる。彼女達は、米国とラテンアメリカ・カリブ地域の中間的要素を持ち、アメリカ従来の人種分類に相容れず、国境の意義、グローバルの意義に変更をせまる存在でもある。その具体的事例、特に貧困、健康問題、教育問題でのプエルトリコ人女性と米国フェミニズムの関係について解き明かし、米国フェミニズムの変容の態様を明らかにする。

3. 研究の方法

① 資料収集および文献分析と、②関係団体および個人への聞き取り調査を主に実施した。プエルトリコ人の女性運動と米国フェミニズム、ブラックフェミニズム、ポストコロニアル・フェミニズムに関する資料収集を行い全体を整理し分析。その上で、貧困対策、健康、教育問題に関するプエルトリコ人女性たちの関わり方、米国フェミニズムとの関係について、関係団体、運動で指導的立場にある女性たちへ面接調査を実施。また、各地域での研究機関、図書館が実施しているオーラルヒストリープロジェクトと連携を深め、プエルトリコ人女性たちが、マイノリティ諸集団または主流フェミニズムとどのような事例で共闘を重ね、その中でコロニアリティがフェミニズムとどう関連しているのか、他のマイノリティ集団との相違点を含め調査分析した。

4. 研究成果

マサチューセッツ州ボストンにおいて、現地調査を実施した。18世紀ボストンは海洋貿易の中心地として栄え、19世紀のアメリカの工業化を担い、多くの移民を受け入れてきた多様性を持つ都市として発展してきた。もともと多様な人々からなる社会としての歴史を持つ地域であるが、昨今はアジア人およびヒスパニック系の人口増加率が飛躍的に伸びている。ここ20年ほどでアジア人およびヒスパニック系の人口増加率は倍増しており、それに伴いボストン市内の人種住み分け地域も大きな変化を遂げている。ボストン地区には、プエルトリコ人コミュニティのvilla victoria がコミュニティ運動を通してジェントリフィケーションに抵抗し、コミュニティ活性化に取り組んでいる。教育サービスなどを通して貧困問題の解決に取り組んでいる。コミュニティでは教育サービスとしてカレッジ案内などのサービスも開始されており、コミュニティ活動が洗練されてきている。ボストン地区は学術都市でもあり、大学などが地域活性化としてコミュニティ活動に関わり、プエルトリコ人女性たちの健康問題などにも取り組んでいる。貧困問題解決策としての教育の分野、健康問題での女性たちの取り組みが活発であった。当然そのようなリーダーシップはスペイン語が必要となってくるためヒスパニック系女性たちが担っているが、その取り組みはプエルトリコ人コミュニティにとどまらず、他のスペイン語系移民の間にも広まっている。ボストンへの移民の歴史的な流れの中でプエルトリコ人の移民の歴史は大きな意味を持ち、多様な人々への受容の点で、プエルトリコ人コミュニティの活動はそれなりの成果をあげてきたと言える。特に女性リーダーシップが発揮された教育、健康の分野での取り組みは他のエスニックグループへの参考となる点も多い。ただし、この点を理解していくためには、アメリカ全体での多様性受容の様態の認識が必要となる。特に2012年の新大統領以降、多様なエスニックグループの存在に対するヘイトクライムの増加など、想定

外の事実が新たに顕著になっていた。

また、ニューヨークにおいて現地調査を実施したが、ニューヨークにおけるラテン系の増加は著しく、各地においてその様態が観察された。マンハッタンを離れた地域においてもラテン系住民の増加が進んでおり、現地への定着度が、インタビュー調査などからも浮き上がった。文化的にも近いドミニカ人住民との融合も進んでおり、共生している姿が観察された。マンハッタン地区で教員をしてきたプエルトリコ人女性たちの話からも、現地の生活に根付いており、子息たちもバイリンガルとなり現地化している様子が伺えた。そのほか、ニューヨーク市北部地区を視察したが、例えばYORKERSは、人口10万程度であるが、アフリカ系、ドミニカ系、メキシコ系などが居住し、ブロンクスの延長に思え、マサチューセッツ州スプリングフィールドを思い起こさせた。プエルトリコ人居住区が拡散しただけでなく、他のヒスパニックも拡散しており、大都会以外のタリータウンなどにも定住している様子が確認された。そのような場所では、仕事を求めて大都会に移住するというパターンではなく、知り合いのついでで世話になり、それなりの仕事を見つけていってるとのことであり、その意味で、一般的なアメリカ住民のパターンになっているとも言える。ニューヨーク市北部地区を視察する際の途中の店の店員たちはみなスペイン語であり、大変興味深いものがあった。当初前提としていたプエルトリコ人と他のエスニシティとの関係について、各エスニシティをそれぞれのグループとしてとらえていたが、現実にはかなり各エスニシティの融合が進んでおり、視点を変える必要が出てきた。個別のグループの問題を捉えつつ、全体として同じアメリカ住民として生活している点についても留意する必要がある。

また、プエルトリコ人の女性運動と米国フェミニズム、ブラック・フェミニズムに関する研究も実施した。プエルトリコ人は、アフリカ系住民との文化的共通点があり、マイノリティ運動では共闘することが多かった。しかし、スペイン語圏の文化という特徴もあり、最近では、他のラテン系女性とともに共闘することも多い。しかしながら、アメリカにおける急激なラテン化現象にアフリカ系アメリカ人の中で反発が起こり、スペイン語の使用を主張するラテン系住民への反発、労働の機会をラテン系移民に奪われるのではないかとする黒人側からの反発なども重なり、常に政治的に共闘が成立するわけではない。主流派白人層との対抗上、可能な範囲で共闘する判断が行われる。ただし、多様性の理解のもと、双方の歴史的な過程や状況の理解が進み、反発を乗り越えた共闘のケースが出てきた。貧困地域に追い込まれた住民同士として教育や健康問題、差別問題を解決していくために共闘しないことには政治的影響力を行使できない。そのため、具体的な教育、健康問題でマイノリティとして共闘する事例が見られる。これらの事例を通し、プエルトリコ人文化のなかに黒人問題への意識変化が起き、これまでプエルトリコ人社会では黒人問題は存在しないとされていた常識に変化が起き、黒人女性としての自覚を啓発する運動がプエルトリコ人のなかに生じた。また、アメリカで表面化したLGBTに対する権利運動などの影響がプエルトリコ人のなかに生じ、これまでタブー視されていた問題がプエルトリコ人黒人女性のなかで顕在化するなどの影響が出ている。つまり、プエルトリコ人女性の運動がメトロポリスであるアメリカ社会の質的变化に深く影響をおよぼすと同時に、プエルトリコ人女性運動のなかにも米国フェミニズムで可視化された黒人女性の問題、LGBTの問題が顕在化するといった現象が見られ、相互に影響が認められた。

2009年には、ニューヨーク市ブロンクスの貧しいプエルトリコ人家庭の出であるソニア・ソトマジョールがラテン系女性として初の最高裁判事に就任し、2018年には同地区出身のプエルトリコ人女性、アレクサンドリア・オカシオ＝コルテスが民主党大物政治家を破り連邦議会下院に最年少の議員として当選を果たした。その後も同議員は、トランプ大統領の「移民は出て行け」攻撃の対象として他のマイノリティ女性たちとともに「過激な女性議員4人組」として与党側の攻撃の標的となり政治上の焦点として論争を呼び起こしている。また、2017年にはプエルトリコ・サンファン女性市長カルメン・ユリン・クルスが、プエルトリコを直撃したハリケーン被害へのトランプ大統領の対応を激しく非難し、その批判の手厳しさに対して米国大手メディアから種々の賞を受賞し注目を浴びた。これらの現象は、ラティーノ系住民の抱える貧困、医療、教育などの問題に対処していくことを余儀なくされている現在の米国社会の姿を反映している。同時に、プエルトリコ人女性が植民地状況下にあるマイノリティとして不可視化されていた状況から一転して米国社会の問題解決を担う重要な存在であることが顕在化した事

例として注目に値する。

これまでもプエルトリコ人女性たちの運動は米国のフェミニズムにおいて、人種、マイノリティ、文化的多様性の概念の形成と変容の過程に深く関与してきた。一方米国では、ブラック・フェミニズムから提起されたフェミニズムズ、あるいは状況の異なる米国内の多様な女性たちを包摂するインターセクショナル・フェミニズムが米国フェミニズムの中で重要な位置を占めるようになった。その結果、ジェンダー以外の多様な差別をフェミニズム理論が内包し、視点が多角的に発展している。プエルトリカン・フェミニズムの分析視点もこの米国フェミニズムの動向と合わせて考える必要がある。プエルトリカン・フェミニズムがプエルトリコ社会および米国社会で与えている影響とその位置付けを、米国フェミニズムの昨今の動向、特に理論的進展の目覚ましいインターセクショナル・フェミニズムとの関係のなかで整理し、分析解明する必要があることが明らかになった。

プエルトリコはアメリカの植民地としての特殊な状況にあり、その特殊性に変更はない。しかし、米国フェミニズムが多角化している現在、米国内の他のマイノリティ女性と一線を画すのではなく、プエルトリカン・ジェンダーの問題を、島も含めてアメリカの一側面として捉え直す時期に来ている。そのことは、プエルトリコ人の昨今の人口動態からも推察できる。2010年の国勢調査の時点ですでに米国本土のプエルトリコ人の数は島の人口を凌駕した。また2017年のハリケーン・マリアの被害以降は米国本土への人口移動は急増し、米国本土のプエルトリコ人人口は2017年の550万人から2018年で580万人へと急増した。特にフロリダ州への人口流出が多く、これまでプエルトリコ人人口が最も多かったニューヨーク州の107万人を超え、フロリダ州が119万人に増加した。一方で島の人口は2017年の334万人から2018年の320万人と人口減少が顕著となった。(New Estimates of Puerto Rican Migration Post Hurricane Maria in 2018: Florida Continues to Grow as the State with the Largest, Center for Puerto Rican Studies, Hunter College, Issued September 2019. Centro DS2019-02.) 島の人口が減少し、これまで米国東海岸へ人口が集中していた時期から南部などへ人口が拡散している。これらの経緯のなかで、プエルトリコはますますアメリカ社会とのボーダーが薄れてきていることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----